

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 33

## 近江、湖南・湖東の古代寺院

## — 渡来系寺院が目立つ湖南・湖東 —

寺岡 洋

## ■瓦積基壇・輻線文縁軒丸瓦・湖東式軒丸瓦

前号では、日本列島で見られる瓦積基壇・輻線文縁軒丸瓦は近江で盛行しており、渡来系氏族・集団が建立を主導した古代寺院に採用された可能性が高いことを紹介した。さらに、今号で紹介する近江愛知(えち)郡の古代寺院に集中して見られる「湖東式軒丸瓦」や、「指頭圧痕軒平瓦」も瓦積基壇などと同様、渡来系氏族と関連すると考えられている。

関連遺跡をまわるのに、いつものようにK氏にお世話になっています。

## ■手原(てはら)遺跡・手原廃寺

手原遺跡は栗東歴史民俗博物館の北、1 km強、JR草津線手原駅周辺一帯。野洲(やす)川の左岸。古代東山道から分岐した東海道が通過した。現在は、国道1号線、名神、JR東海道本線、新幹線が並走する。

一帯は旧栗太(くりた)郡の東に傾く条里地割と異なる南北方位の地割が残り、古瓦が採集されることから寺院の存在が推定されていた。古瓦の集中するのは駅の南東側の方二町の範囲。

軒丸瓦は、「素弁(無子葉)の輻線文縁」(上図)が2種、複弁の法隆寺式、川原寺式など。軒平瓦や鴟尾(しび)片、埴(せん)も出土している。

調査では、寺院の遺構(基壇など)は確認されていないが、庇付の大型建物が見つかり、寺院、あるいは栗太郡家(ぐうけ)に関連する施設とされる。木簡(もっかん)や墨書土器、転用硯が出土する。

駅の北西側では奈良時代中期の倉庫群が調査され、寺院に伴う「倉垣院(そうえんいん)」、あるいは郡家に伴う「倉院」と考えられている。

## ■下鉤東(しもまがりひがし)遺跡(栗東市蜂屋)

手原廃寺の西で古代寺院跡と、それに先立つ建物群が調査されている。東西に寺院が並列する景観になり、駅路(えきろ)が両寺院周辺を通過していたのではないだろうか。

## ■小平井(こびらい)廃寺(栗東市小平井)

下鉤東遺跡のさらに北西、JR栗東駅の西、草津市との境、蛭子(ひるこ)神社周辺。数種類の軒丸瓦が収集されており、素弁十一葉のものは高句麗系とされる。瓦当裏面には叩き痕が残る由。秦氏系の氏族が建立に関わっていた可能性が推測できる。

## 野洲川左岸の渡来系氏族

栗東市域でも大壁建物やオンドル状遺構(L字形カマド)、軟質土器など渡来人の居住が確認されている。これらの遺跡

周辺には、五百井(いおのい)や治田(はるた)、高野の地名が残り、渡来系氏族である「廬井造(いおのいのみやつこ)」「治田連(はるたのみらじ)」「高野造(たかのみやつこ)」などの居住が推測されている。

いずれの氏族も単独で寺院を建立・維持するのは困難であり、共同で建てたのであろう(知識寺院)。

栗東市域では野洲川流域の3ヶ所以外に、金勝山(こんぜさん)山中に狛坂寺(こまさかであら)がある。新羅系石工が関わったのではないとも言われる狛坂磨崖仏(国史跡)は有名。

## ■宝光寺跡(草津市)

小平井廃寺の北西およそ3 km、浜街道(県道26号線)沿いの宝光寺を目指す。

所在地が大萱(オオガヤ)町、北接して「穴村(アナムラ)町」があり、加耶関連の地名が並び、天日槍(アメノヒボコ)を祀る安羅(アラ)神社もある。

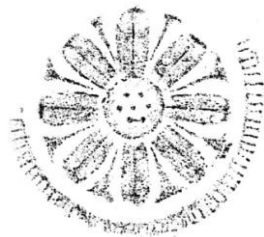
宝光寺周辺では、畑や新築家屋の工事に伴う道・溝などに瓦の細片が散在していた。

宝光寺跡から北方一帯の湖岸(草津市北西部)には、狭い地域(境川~葉山川)に7ヶ所もの古代寺院跡・推定地が密集して分布する。すべて寺院であれば、特異な景観を形成していたであろう。「河内六寺」にならえば、「湖南七寺」とでも。

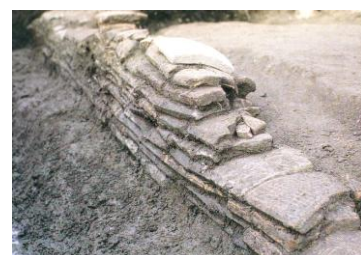
宝光寺・大萱神社境内が寺院跡に想定され、発掘調査が行われた。

## 瓦積基壇・輻線文縁・方形瓦・四葉文瓦

本堂周辺では、推定講堂の瓦積基壇(右図)が



輻線文縁軒丸瓦



見つかった。西辺と北辺のコーナー部は重弧文軒平瓦が使われ、装飾効果を狙ったものであろうか。瓦溜り（廃棄土坑）からは多くの白鳳瓦が出土した。

向かい合う大萱神社周辺では、焼土層が確認され、講堂の南西に堂塔があったと推定されている。

出土した瓦には、南滋賀廃寺や穴太廃寺など大津北郊の渡来系寺院で見られる「**素弁の輻線文縁軒丸瓦**」や「**方形瓦**」があり、「**瓦積基壇**」ともあわせ渡来系氏族が建立を主導したと考えられる。

宝光寺跡といえば高句麗系、あるいは高句麗・新羅系とされる特異なデザインの**四葉文**（右図）の軒丸瓦が知られるが、いずれ紹介したい。四葉文軒丸瓦は播磨の太寺（たいでら）廃寺（赤石郡）でも2種類見られる。



宝光寺の建立は、漢人系の磐城村主（いわきのすぐり）、大石村主（おおいしのすぐり）、あるいは、大友日佐（おおとものおさ）、山田連（やまだのむらじ）などの氏族が挙げられているが、特定するのは困難。

#### ■芦浦観音寺廃寺（草津市芦浦町）

浜街道を約1.5km北上し、芦浦バス停辺りで右折すれば芦浦観音寺。左折すれば花摘寺廃寺。途中、道沿いに「**片岡廃寺跡**」があるが、詳細不明。

芦浦観音寺は土塁と濠をめぐらした城館風の寺院。実際、織豊時代～徳川時代初期には船奉行や代官を務め、39,000石を管轄していた。

芦浦観音寺周辺には栗太郡条里と異なる正方位の地割が残ри、境内から数点の瓦と2個の礎石が残ることから寺院と推測されているが、詳細不明。

すぐ西の芦浦遺跡では、大型円墳を含む古墳群などが調査されている。

#### 葦浦（あしうら）屯倉（ミヤケ）

芦浦観音寺周辺は葦浦屯倉推定地。東には「三宅」地名が残る。三宅の北側になる赤野井遺跡（守山市）は、葦浦ミヤケ関連遺跡とされる。正方位地割が残り、「大田」とも見られる墨書土器や、「犬養」という地名が残る。ミヤケの設置・運営には渡来系氏族・集団が関わることが多く、古代寺院が集中する社会的条件になる。



#### ■花摘寺（はなづみでら）廃寺

芦浦観音寺から西へ600m。バス道沿いの下物（おろしも）天満

宮境内周辺が寺域推定地。この優雅な寺名は太子信仰と関連するそう。この廃寺も周辺に東に傾く条里地割とは異なる南北方位の地割が残る。

境内に入ると右手に10数個の礎石（柱座をもつものも混在する）が安置される。左手の太子堂の前には大型の手水石（239×179×70cm）が置かれ、塔心礎ではないかと推測されている。

木の陰に塔露盤（ろばん）かと見られる円孔（径66cm、厚さ41cm）をもつ截頭四角錐台状の大型石製品（一辺174cm）が立っている（左欄下）。塔の上に載せられたのだろうか、という程大きい。

発掘調査で、東西1町半、南北2町の寺域が想定されている。寺院に伴う雑舎（ざっしゃ）があったようだが、伽藍の遺構は確認されていない。

出土した瓦には、いわゆる渡来系とされるものは報告されていない。白鳳時代に創建され、10世紀末頃に廃絶したとされる。

#### ■観音堂廃寺（草津市下寺町）

花摘寺廃寺の南西300mくらい、天神社・観音堂・常教寺境内を含む一帯に条里地割と異なる正方位地割が認められ、古瓦が収集され、礎石も残ることから古代寺院跡が想定されている。

天神社が祀られている場所は周囲の水田より1m前後高く、基壇の名残であろうか。瓦の小片が探せばあり、礎石も残る。寺域の中心のようだが、伽藍の遺構は確認されていない。

圃場整備に伴う寺域確認調査により、方二町（南北218.5×東西195m）が寺域とされる。寺域東側の東西溝では、寺院址を裏づける多量の土器、木製品、墨書土器が出土した。

また、寺院址に先行する地割遺構の存在が指摘されており、先行地割はミヤケの開発に伴う時期以外考えられず、葦浦ミヤケとの関連が浮かぶ。

ミヤケとも関連するが、観音堂廃寺の寺域北限の東西溝を東に延長すると花摘寺廃寺南限の東西溝に一致するとの見解もある。両寺域の東限と西限の間は200m。あるいは、僧寺と尼寺ではないかも想像できる。

観音堂廃寺では、「**素弁の輻線文縁軒丸瓦**」の破片が4片出土している。白鳳時代に創建され、10世紀中頃まで存続したとされる。

#### ■銅鐸博物館（野洲市歴史民俗博物館）

テーマ展「瓦の考古学」開催中。野洲・草津・栗東地域を中心に多くの瓦が展示されていたが、図録・冊子がなく残念だった。



## ■福林寺と磐城村主（いわきのすぐり）

博物館では福林寺遺跡の軒瓦や鴟尾が展示されていたが、福林寺址は博物館のすぐ西、野洲中学敷地内の遺跡に比定されている。「造石山院所用度帳」（762年）には、「（夜須郡）附近江林寺」とあり、この林寺と福林寺は同じ寺らしい。

3kmばかり北方の八夫西ノ後（やぶにしのおしろ）遺跡（野洲市）では、「福林寺」銘の墨書土器、古瓦、礎石2個、奈良三彩などが出土している由。

福林寺は、「東寺文書」（1101年）に、「福林寺は天武天皇のとき、磐城村主宿禰（すくね）が建立した」とあり、渡来系人物が建立を主導している。

磐城村主については、『日本書紀』天智三年の記事に、「栗太郡の人、磐城村主殷」がおり、八夫遺跡の1.5kmばかり北の西河原森ノ内遺跡（野洲市）では木簡に「石木主寸（いわきのすぐり）□□呂」があり、野洲川右岸に磐城村主の居住が確認できる。『新撰姓氏録』には「石寸（いわき）村主」と表記。

銅鐸博物館のすぐ近くには桜生（さくらばさま）史跡公園がある。7号墳に副葬された短頸壺にはヘラ書き文字（「此者□□首□□」）があり、この時期に文字を書けるのは渡来系の人物であろう。

## ■雪野寺（ゆきのでら）跡（蒲生郡竜王町）

日野川中流の右岸、名神高速道路の北に位置する雪野寺跡（龍王寺）は、鏡山（385m）を挟んで福林寺址（野洲中学）からほぼ真東になる。

天日槍（あめのひぼこ）伝承の近江吾名邑（あなむら）は鏡山周辺とされ、鏡邑の谷の陶人（すえびと）は天日槍の従人と伝える。苗村（なむら）神社（竜王町綾戸（あやど））の苗村（長寸・那牟羅）は吾名邑が転訛したらしい。

雪野寺跡は雪野山（309m）の南西麓、日野川に面し、龍王寺境内と重なる。雪野山は安吉（あぎ）山とも呼ばれ、一帯は蒲生郡安吉郷に比定される。

龍王寺は白鳳時代創建の雪野寺（野寺とも呼ばれる）の法灯を継ぐとされる名刹であるが、無住になっていた。重文の奈良時代の梵鐘（野寺の鐘）や仏像を所有している。

隣接する天神社の参道から見学させていただいたが、天神社と本堂の間に草に埋もれて塔跡が残る。

発掘調査により乱石積基壇の塔跡（一辺約13.6m）と、塔跡の北西で講堂、その西側で食堂（じきどう）と推定される建物址が確認されている。

雪野寺と言えば童子像などの多くの塑像（そぞう）の出土で知られるが、まだ見る機会がない。塔跡とその西北の建物跡から出土している。

## 湖東式軒丸瓦・

### 指頭圧痕重弧文軒平瓦

湖東の旧愛知（えち）郡を中心に湖北・越前、さらに美濃・尾張・信濃まで分布する極めて特徴ある瓦に「湖東式軒丸瓦」と呼ばれる一群がある。

湖東式軒丸瓦は畿内に類例のないデザインをもつ（右図）。端折って説明すれば、瓦当の中心になる内区の中房（ちゅうぼう）に大きな蓮子（れんじ）を一つ置き、その周囲に多数の蓮子を廻らせ、さらに外区内縁に珠文を廻らしている。

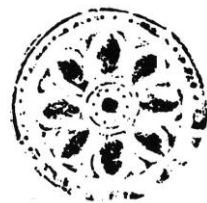
類似する瓦が公州・大通寺址（上図）や南穴寺址で収集されており、無関係とは考えにくい。

湖東では依知（えち）秦氏が大きな勢力をもっていたことが文献・古墳群から推測されており、湖東式軒丸瓦の使用と関連すると理解されている。

雪野寺跡では、湖東式軒丸瓦と指頭圧痕をもつ重弧文軒平瓦が出土しており、渡来系氏族・集団が主導、あるいは関わった寺院の可能性はある。

安吉郷（阿伎里）には郷（里）名にもなった有力集団である安吉勝（あぎのすぐり）が居住しており、「勝」姓をもつことから渡来系氏族である。

公州・大通寺址



軽野塔ノ塚廃寺



## ■宮井廃寺（東近江市）

日野川をさらに2kmばかり上流に行くと宮井廃寺が左岸に位置する。蒲生北小学校の北。

水田中の微高地に小祠（天神社）が見えるが、金堂址である。廃寺址と、北に接する野瀬遺跡が発掘調査されており、寺域は南北2町・東西1町半。伽藍配置は金堂の南西にのみ塔を配する。講堂は不明。

金堂基壇の規模は東西16.7m×南北11.7m、外装（化粧）は瓦積基壇。礎石が点在する。

金堂の南西に塔基壇が残る。一辺約12.75m、高さ1.2m。外装は乱石積と推測。礎石がよく残っていた。上面から焦土・壁土などと共に塑像片、泥塔、銅片、銅粒などが出土している。

塔心礎は天神社境内の南端に動かされており、草に覆われて隠れていた（上図）。

軒丸瓦は外区内縁に雷文がめぐる小山廃寺式（紀寺式）と呼称されるものである。軒平瓦には指頭圧痕重弧文軒平瓦があるが、湖東式軒丸瓦は1点採集されているのみでセットにならない由。

＊参考引用文献は「むくげの会HP」をご参照下さい



はじめに

今回も前号に続き近江の古代寺院になります。銅鐸博物館（野洲市歴史民俗博物館）で開催されたテーマ展「瓦の考古学」を見に行くのにあわせ、琵琶湖の湖南・湖東の古代寺院址を見てきました。

近江は飛鳥・白鳳時代の古代寺院推定地が60ヶ所余り存在し、すべてが寺院址とは確認されていないが、大和、河内に次ぐ多さである。そして、寺院数の多さは渡来系氏族・集団の移住と関係すると考えられており、播磨の参考になる。

滋賀漢人（しがのあやひと）と総称される漢人系渡来氏族は古墳時代後期、河内や大和からの移住であろうが、百済滅亡（660年）に伴うレベルの高い百済人が多数近江に移住したことも関連するであろう（百済官女・美女も白馬江に身を投げたと称し、ことごとく倭国に逃亡したのじゃないかと妄想している）。

#### ■栗東（りっとう）歴史民俗博物館

まず、名神・栗東ICで下り、博物館へ。企画展「登場！ 大型建物 一近江の弥生集落一」の最終日。

近江・野洲川流域の弥生集落は、九州の吉野ヶ里遺跡や大和の唐子鍵遺跡と並ぶ最大級の規模。

朝鮮半島との交流を裏付ける遺構も知られる。環濠集落として有名な下之郷遺跡（守山市）では、弥生時代の一般的な竪穴住居跡がなく、掘立柱建物と朝鮮半島に起源をもつ「平地式の壁立式建物」のみであり、集落の景観がはなはだ異なっていた。

伊勢遺跡（守山市～栗東市）の床面積185㎡という超大型建物の床は赤く焼かれており（焼き床）、壁際にはレンガ状の建築部材を使用した、列島では稀有な特殊な構造であった。下鈎（しもがかり）遺跡（栗東市）は青銅器生産の拠点。

#### 参考・引用文献

栗東歴史民俗博物館 1991

『湖南の古代寺院 一栗太郡の白鳳寺院を中心に一』

栗東市教育委員会他 2006

「手原遺跡発掘調査 現地説明会資料」

栗東市 2010「りっとう再発見62～伝来文化の影響」

栗東歴史民俗博物館他 2012

「幻の白鳳寺院 ～逸名の寺をさぐる～」

藤居 朗 1981「草津市宝光寺遺跡 発掘調査概報」

『滋賀文化財だより』57

小笠原好彦 2000「近江の古代寺院と渡来系氏族」

『近江の考古学』サンライズ出版

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1977

「草津市下物花摘寺遺跡」、「草津市下寺観音堂遺跡」

『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅳ－Ⅰ

重岡 卓 1997「“湖東式軒丸瓦”に関する基礎的考察」

『紀要』第10号 滋賀県文化財保護協会

安土城考古博物館 2008

『仏法の初め、茲（これ）より作（おこ）れり』

安土城考古博物館 2008『古代地方木簡の世紀

一文字資料から見た古代の近江一』